

「富士図」

着色水墨 1947年頃

児島善三郎

Zenzaburo Kojima

1893-1962 (明治26年-昭和37年)

1893年 福岡市中嶋町に生まれる
 1912年 福岡県立中学修猷館卒業
 1921年 第8回二科展 初入選
 1925年-28年 欧州留学
 1930年 独立美術協会設立

その後も「日本人の油絵」の創造を目指して活発に創作活動を展開し、1962年に逝去。

2012年は没後50年の記念の年であり、新画集「児島善三郎・秀作撰、油彩画総覧」2冊組を3月中旬に刊行予定。



題字・箱島信一書
 発行 修猷館同窓会
 東京支部事務局

〒185-0034
 東京都国分寺市光町 2-14-85
 (有)パルティール内
 FAX 042-573-5060
 東京修猷会ホームページアドレス
<http://www.shuyu.gr.jp>

人間—自然の中の小さな一員・大きな生命力



東京修猷会会長
中川勝弘
 (昭和35年卒)

明けましておめでとうございます。

昨年は東北大地震・大津波をはじめ、自然が猛威をふるい、人間は無力だとつくづく感じた年でした。大震災のあとにも、大雨による洪水が首都バンコクを中心部までに迫ったタイなど、異常気象に驚かされた年でもありました。あらためて人間も自然の小さな一員なのだと感じさせられたわけですが、コンクリートに囲まれた都会に住んでいると、この当たり前のことをつい忘れてしまいがちなことも事実であります。

「自然にやさしい街づくり」とか、「人間が自然にやさしくする」とか、「自然との共生」とかいう言葉がよく使われます。これはいずれもいわば人間が自然を人間と別の対象と考えたり、また、対立関係ととらえているわけですが、当然のことながらそうではなくて人間は自然の一員、あるいは一部であります。

森や山野を切り開いて都市をつくり、経済社会の発展を成し遂げてきた中で、いつの間にか自然は人間にとって対立関係にあり、時に征服すべき相手となってしまうたのでしようか。興福寺の多川俊映貫首はその著書の中で、「漂泊の俳人種田山頭火の「自己を自然の一部分として観る」という言葉をひいて、「自然と人間は別物ではない」と言っておられます。さらに、自然農法の第一人者である福岡正信氏の「百姓は自然に仕えてさえおればいい」という言葉を借りて、人間の浅はかな知恵で自然を変えられると思えば、一歩下がって人間も自然の一員たれとも論じておられます。

最近「リサイクル」だとか、「有機栽培」だとかいわれると、人間が自然を大事にしているんだぞといわんばかりで、何となくわざとらしさを感じていたのですが、結局のところ、この基本的な自然の一員としての哲学を忘れていたのかもしれない。

しかし、だからといって、自然の一員であるとしても、自己犠牲をいとわない人間の素晴らしさ、また強さを否

定するわけではありません。東北大地震の中で自らを捨て、津波がくるとの警報を流し続けて逝ってしまった役場の人たち、建物の屋上の小屋の屋根にお婆さんを押し上げて自らは水に流された人、このように自らの危険も顧みずに他者を思いやる痛ましくも素晴らしい行為は心を打ちます。そして、家も家族も全てを失った人が、不慣れた避難所生活をしながら、笑顔までみせて再び立ち上がる様子に、深い悲しみをこえて明日へ向けて立ち直ろうとする人間の強さ、素晴らしさに感動を覚えるのも事実であります。神はなぜこのように過酷な試練を与えたのかと茫然として瓦礫の前に立ちすくむ人々が、お互いに励まし合って、生きていく力を取り戻していく、この力も神が人間に与えてくれた生命力なのだと思います。

そして東北大地震の被災者に対して文字通り世界中の人々から支援の手がさしのべられました。見知らぬ人々の善意が被災者に届けられ、被災者が心から感謝するという人と人の絆のつながりが、国境を越え、人種を越えて世界中に広がりました。いわば地球家族の一員として人々が動いたということだと思います。国家レベルでは地球はひとつという具合にはいきませんが、人々の善意がその垣根を越えていったということだと思います。あらためて、人と人の絆の大切さを感じさせられました。日本では気心の知れた仲間のことには親身になってお世話しても、面識のない他人が困っている時に手を差し伸べるのは、気恥ずかしい思いがするからでしょうか、今まではあまり行なわれなかった様な気がします。しかし、この大震災をきっかけに人と人の心のつながりが強くなったような気がしています。

人間が自然の中で如何に小さい存在か、しかし同時にあわせて人間のもつ生命力が如何に大きいのか、そして人々の絆のつながりが如何に強いのかということを再確認して、新しい年を「いい年」にしていきたいものです。

なお、修猷館の「決していばらず控えめだが、自由闊達に」という精神は、自然と人間について私が述べてきた精神と全く軌を一にしていると思います。今年も東京修猷会の方々や現役館生を含めて、大いに修猷精神で頑張ってくださいたいものであります。



東京修猷会〇二〇二〇年活動スケジュール
 二木会は6、8月を除く
 毎月第二木曜日開催

1月	二木会 於：学士会館 会報発行 正月に全会員に送付
2月	二木会 於：学士会館
3月	二木会 於：学士会館 春季常任幹事会
4月	二木会 於：学士会館 二木会新人歓迎会
5月	二木会 於：学士会館 二木会ゴルフコンペ
6月	二木会 於：学士会館 総会
7月	二木会 於：学士会館 別館アスコットホール 午後6時より (幹事学年は昭和61年卒)
8月	二木会 於：学士会館
9月	二木会 於：学士会館
10月	二木会 於：学士会館 未定(土曜日) サロンド・修猷
11月	二木会 於：学士会館 二木会ゴルフコンペ 秋季常任幹事会
12月	二木会 於：学士会館 二木会忘年会
13日	於：未定

二木会では、毎回各界でご活躍されている卒業生の方々から貴重なお話を聞きつけてご参加下さい。

2011年度東京修猷会総会

「プレイバック！修猷」

Special thanks for ALL

〜心からの感謝をこころ〜

実行委員長 山崎

平成23年 東京修猷会総会
琢哉(昭和60年卒 猷馬会)

平成23年6月3日金曜日。東

京修猷会総会が開催され、ホテルオークラ・アスコットホールには624名もの会員の方々にお集まりいただきました。ご参加いただいたみなさま、ご協力いただいた方々、本当にありがとうございました。今、改めて感謝の気持ちでいっぱいです。

総会へ向けて、同期が毎月20名以上集まり、どのような総会にするかと議論と準備を積み重ねておりましたが、昨年の3月11日を境に状況は一変しまし



懐かしい映像を見ながら(クイズ企画)

影した写真で話してくれた関東大震災の話と比べ、当時のようなパニックやデマによる暴動・虐殺などもなく、粛々と日常を取り戻そうとする多くの方々の姿に触れて、関東大震災や第二次大戦後の困難な状況から立ち上がった日本人は、必ず前向きに「

の状況をクリアしていけるはずだという確信を抱きつつありました。

3月下旬の常任幹事会で私たちの案を承認していただいた際に「よし、敢えてこういう時期だからこそ、元気に盛り上げていこう！きつと多くの方にご理解いただけるはず。同期の仲間がいるし、応援していただける先輩方も後輩たちもいるから、きつと何とかなる！」と肚を据え直し、それから総会へ向けて一気に駆け抜けていきました……

当日は、第1部の総会では、例年通り物故者への黙禱などが行われた後、これまで長年にわたる会長を務めていただいた箱嶋前会長が退任され、中川新会長(前副会長)と清田新副会長(昭和39年卒)の就任がそれぞれ承認されました。

第2部の恩師紹介では、大津ミナ子先生・浅田正人先生のおふたりにお話しいただきました。平成世代の後輩たちには懐かしさ、楽しく聞いてもらえたようですが、諸先輩方からも「とても面白いご講話だった」と大変好評でした。遠路駆けつけていただいた先生方に、感謝するばかりです。

第3部の懇親会は、宮川先輩に元氣よく乾杯のご発声をお願いした後、私たちの同期二人による名司会のもと、テンポよく会が進んで行きました。ご都合で参加できない方などへむけて「Stream」で会場の様子を中継し



挨拶する山崎実行委員長

たりもしましたし、総会企画のひとつの学生応援企画では、先輩方と学生の方たちが活発に交流できるような心を配りました。会場を広くして動きやすかったこと、コーディネート役を置いたことなどもあり、先輩方と若い後輩たちのよい交流の機会となったのではないかと思います。

今年も、ホテルオークラ・アスコットホールで開催予定です。昭和61年卒の皆さんの工夫と想

プレイバック！修猷！世代を超えて！

企画部長 高木 信明(昭和60年卒)



我々が生まれる200年近く前に設立された修猷館。学んだのはわずか3年間だが、我々の内面にはそれ以上に大きな存在感がある。伝統、文化、偉大な先輩方……そんな母校の歴史を多く

「先輩、後輩と共に振り返る」ためには、何か工夫が必要だ、と考えた。まずは、オープニングビデオ。これは、修猷館の歴史を凝縮したもので、総会に対する我々の成功イメージをそのまま表現したものである。懇親会開始直後にこのビデオを見ていただくことで、総会に向けた我々の思いが伝わることを願ったものである。また、その製作についても苦労があった。3分という短いものではあるが、我々幹事学年のメンバーだけで作成した。編集を含め、プロの業者に頼ることなく、コストをかけずに「手作り」で完成させたことが、我々にとつて達成感を大きくしたと言える。

そして、最後は館歌の歌い方にまつわる問いかけ。当初はクイズ問題の一つにする予定であったが、いくら調べても明確な解答に辿り着かず、会場で我々の疑問を投げかけることになった。おそらく、明確な解答はないであろう。そんな謎があることも修猷館らしさなのかもしれない。

今後、さらに深く「プレイバック」してみたい。



先輩の話に耳を傾ける(学生応援企画)

3年前の東京修猷会総会時、当時の修猷卒の大学生と共同で、5ピラとチャリーディングの実演を行った。総会本番前の練習後、若き後輩とテーブルを囲み、杯を酌み交わしつつ、将来の進路等の相談に乗っていた事を覚えていいる。その頃から、修猷の先輩としてもっと色々な方法で後輩の役に立てないか考えていた。その観点で、今回の学生応援企画は正に的を射たものだったと思う。

いつの日か、今回出会った後輩諸君と再び巡り合い、共に「世の為に尽くす」仕事ができる事を今から楽しみにしている。

学生応援企画に参加して—社会人編

日本IBM 西岡 修(昭和57年卒)



な連帯感に度々遭遇して来た。これは修猷が長い歴史の中で培ってきたもののひとつであり、今も脈々と受け継がれているものである。学生諸君は積極的に今回のような機会を捉え「修猷の絆」を活用して欲しいと思う。

就職は人生の一大岐路である。修猷の後輩には、今回の様な機会を積極的に捉え、イメージやランキングのみで判断するのではなく、実社会で活躍する素晴らしい先輩達の生き様に触れ、様々な意見に耳を傾け、最後は自らの意思で進路を決めて欲しいと思う。

学生応援企画に参加して—学生編

緒方 祥子(平成21年卒)



「世のため、人のために働くとは何なのか?」企画を通じて、この疑問を解決するヒントとなるような経験・人に出会えたこと、自身のキャリア選択にプラスのインパクトを与えることができたこと胸を張って言える。

最後に、修猷の「タテのつながり」を活かした企画作り尽力して頂いた、幹事学年の皆様がとうございました。

続・学生応援企画

読売新聞社 原田康久氏(昭和56年卒)インタビュー

厳しさを増す就職活動。これから就活に臨む館友への支援の一環として、この分野で数多くの著書がある読売新聞東京本社人事部の原田康久デスク(昭和56年卒)にアドバイスを聞いた。

—就活を巡る今の社会情勢をどう見えていますか？

就職難と呼ばれて久しいが、中小企業の側から見れば求人難で、就職難と求人難がダブルで起きている。学生の安定志向、大企業・ブランド志向が影響していると思われる。

また、経団連は倫理憲章を改定し、採用の広報活動を従来より2か月遅い12月1日以降とした。ただ、面接などの選考活動は4月1日解禁と変わっていない。このため、準備期間がまるまる2か月間短くなった形だ。学生側が企業研究を十分できないまま、選考に臨まざるを得ないケースが増えるのではないかと危惧している。

よって、情報収集がこれまで以上に重要となるだろう。—就活で重要といわれているエントリーシート(ES)を記入するうえで、気を付けるべき点はあるか？

ESは、自分が採用に値する優秀な人間であることを相手側に伝えるための存在。だから、基本的にどんな質問への答えでも、自己PRにつなげないという意識がない。

例えば「愛読書」に関する欄に、伊坂幸太郎氏の本の面白さに、



原田康久氏 読売新聞東京本社文化部、宣伝部を経て、現在、同社総務局人事部次長(採用担当デスク)。現役の採用担当者の視点から、就活のあるべき姿を発信し続ける。

自分のES・エントリーシートをもて

—面接を受ける上でのテクニック、心構えは？

一方的にまくし立てるとか、できる本を選び、本の面白さを自己アピールにつながるよう、書かないといけない。

「志望動機」の欄でも、受ける会社をたくさん褒めるよりも、自分がこの会社でどう働き、どう貢献ができるかという自己アピールに重点を置いた方がいい。

その際「私は積極性がある」「バイタリティーがある」などと抽象的に記しても、事実の裏付けがなければ、数多くの他のESと同様、読み飛ばされてしまうだけだ。

そうならないためには、相手自分の姿を具体的に想像できる情報を、エピソード付きで書かないといけない。「こんな困難にぶち当たったが、こうやって乗り越えた」などと具体的に記す必要がある。

回答欄が空白だらけのESは、論外だ。会社側にやる気がないと思われるや助言を。

原田デスクの

就活3か条！

- 一、会社選びは人生の選択。最後は自分で決断を。
- 一、マニュアルは就活の敵。自分の軸を持ち、自らの言葉で書く、話す。
- 一、就活は日頃の自分を披露する場。日常生活がすでに就活。

自分が見えてきたら、次に色々な人の話を聞くことを勧めたい。今の若い人は、ツイッターやメールなどにより、仲間内のコミュニケーション量は多いが、自分と違う価値観、世代、国の人とのつきあいは苦手という人が多い。

しかし、就職後は、そういう「自分と違う人」とのつきあいがほとんどだと言ってもいい。そういう「自分と違う人」と積極的につきあうことで、社会の情報が入り、人間の幅も、知識の幅も広がっていく。こんな面白い仕事があるとか、自分はこんな分野に向いているなどが見えてくる。

—就活を控えた館友にメッセージをお願いします。

修猷館の先輩は母校愛が強く、多分野で活躍しているのので、OB、OG訪問をすれば重要な情報源になる。これを使わない手はない。

ただ、「修猷館」の看板に頼るのではなく、そこで学んだこと、体験したことを具体的に興味深いエピソードを基に語ることができるようになることが大事だ。そうすれば、就活の強力な武器になるだろう。

猛暑続きの8月27日土曜日の午後、第5回Salon de 修猷が、70名弱のご参加を得て開催された。

第28回東京修猷会

二木会ゴルフコンペ

二木会ゴルフ幹事 友枝城太郎(昭和60年卒)

2011年10月16日(日)恒例の二木会ゴルフコンペが開催されました。

中川会長、清田副会長をはじめ、初参加15名、女性5名を含む総勢33名が千葉県のヌーヴェルゴルフ倶楽部に結集しました。

前日からの雨で開催が危ぶまれていましたが小雨の中の開会式での「本日はいいゴルフ日和になりました」という中川会長の一言通り、コンペ開始と同時に雨もやみ、絶好のゴルフ日和となりました。



優勝は前回に引き続き田中昭人さん(昭和56年卒)、準優勝は伊豆安生さん(昭和43年卒)、3位は山下環さん(昭和59年卒)となりました。女子ベスグロはグロス90で3年連続受賞の松岡郁子さん(昭和56年卒)、男子ベスグロはグロス86で松尾隆広さん(昭和54年卒)と優勝の田中昭人さん(昭和56年卒)が同点でした。

ラウンド後の表彰式&懇親会では、ゴルフ談義に花を咲かせるとともに、世代を超えた館友の輪を広げることができました。今回も、参加された皆様はもとより、残念ながら参加できなかった東京修猷会の皆様から、数多くの豪華な賞品をご提供いただきました。また今大会開催コース関係者の中原滋さん(昭和54年卒)には賞品提供をはじめ大変お世話になりました。皆様にはこの場をお借りして厚く御礼申し上げます。

次回大会は、2012年4月15日(日)、大須賀副会長のご厚意により名門「富士小山ゴルフクラブ」での開催を予定しております。皆様奮ってのご参加を宜しく願います。

管楽器と弦楽器が揃いピアノが加わった、色彩豊かで華やかな音楽が展開された。会場は美しい音色に引き込まれ、陶然とした空気に包まれた。

東京修猷会2012年度総会のご案内
 テーマ：「GO AHEAD! 修猷！」

6.15
 今年は第3金曜日

2012年6月15日(金) 18:00よりホテルオークラ東京 別館地下2階アスコットホール
 幹事学年:61会[通称いくやろ会](昭和61年卒)

*** Salon de 修猷 ***
 第5回
 一名曲に響く「鐘」の風景—
 鈎 典子 (昭和59年卒)

心の中で鳴り響いていた鐘というイメージで選んだピアノ曲を3曲独奏、続いて、原さんと嶋田さんにご登場いただき、岩城さんが高校時代から演奏したいと憧れ、当時の思いを投影した曲の数々をお聴かせいただきました。



元気を西から。県民幸福度日本一。

福岡県知事
小川 洋 (昭和43年生)

明けましておめでとうございます。案件を原案通り成立させることができました。これからも、緊張関係を保ちつつも、県民福祉の向上という共通目標に向けて、協力していきたいと考えています。



小川知事

新しい年をふるさと福岡で迎えることになりました。昨年四月の統一地方選挙で、福岡県知事に就任。修猷を卒業して以来、四十三年ぶりの福岡での生活です。

日本は、今、東日本大震災、電力の安定供給、円高、厳しい雇用情勢といった大きな困難に直面しています。こういう時こそ、福岡県は、その持つ力を最大限発揮して、元気になり、被災地の復興とこの日本の国力の維持に役割を果たしていきたいと考えています。

「元気を西から」です。また、私は、県民生活の「安定」「安全」「安心」を向上させるための関連施策を総動員することによって「県民幸福度日本一」の福岡県を目指しています。

提出した六月県議会は、選挙戦の経緯もあって、「知事部局との距離と議会改革」を唱える議会と「ガチンコ」対決となりました。出口が見えないときもありましたが、予算をはじめ、全ての

の福岡県を目指しています。二十年紀は「バックス・アメリカナ」の時代。これに合わせて、関東圏、太平洋ベルト地帯に人口、産業、各種機能を集中させ、日本は発展してきました。しかし、大震災の教訓を生かして、安全保障を高め、これからの安定的な発展していくためには、特定地域への集中を見直し、全国にバランスのとれた拠点を配置していかなければなりません。二十一世紀はアジアの時代。アジアと近く、交流の歴史のある福岡県は、日本海側の拠点として、大きな発展の可能性があり

伝わったかな？建築のチカラ

大林組 設計本部
坂田 尚子 (昭和57年生)

昨年5月、創立記念行事の一つとして「卒業生キャリアセミナー」が開催されました。卒業後30年目を迎える昭和57年卒(剛賀会)から後輩たちへ、職業観や人生のメッセージを贈るもので、今年も40講座が開催され、私は「建築のチカラ」東京スカイツリー建設物語と震災の対応」と題し、建築を造る側の視点からお話をさせて頂きました。

ご存じの東京スカイツリーは、3月の大地震にも被害を受けることなく、その一週間後には最終的な634mの高さに到達しました。未知の高さ故に課題も多く、様々な開発技術が採用さ

れました。例えば、狭小な塔の上に設置するためのコンパクトで風や地震に強く、長距離の揚重が可能な特別仕様のクレーンもその一つ。旋回時に互いの交錯を回避するシステムも搭載しています。荷物が、吊上げの途中で風にあおられてグルグル回らないよう開発された、回転制御装置も採用されました。

複雑な形の鉄骨を高精度に積み上げるために、斜めに伸びる鉄骨を3次元で計測・管理するシステムを採用。GPSを利用したシステムで確認補正し、634mに対して20ミリ以下の誤差という高精度な鉄骨組み立て

を実現しました。実は、建設中のタワーは少しずつ揺れたり傾いたりしています。風や日射、さらに、クレーンで最大30トンの揚重を行うため、タワーが傾くこともあるのです。日射の影響の場合、朝から陽が当たり始めると南側の鉄骨が膨張して、タワー全体の軸が歪みます。これを防ぐために、夕方になるとだんだん元へ戻っていきます。これらの影響



1/300スカイツリーポスターとともに

被災地でのコンサートを通じて

シンガーソングライター・俳優
宇佐元 恭一 (昭和53年生)

それはもう8年前、自宅のピアノを弾きながら、急にそのメロディは降りてきました。「雨ニモマケズ、風ニモマケズ」

今にして思えばほんとに不思議な出来事です。何の企画でもない、頼まれたわけでもない。ただあまりにも自然に、その曲は出来ていました。それが新潟の震災復興のイベントで要請あつて、まだ復興ままならない青森が残る町、魚沼市の役所前のステージで、初めて歌いました。皆さん、涙を流して感動されました。そして次第に、CD発売を望む声が強くなり、宮沢賢治さんのご遺族などの手厚いご協力もあつて、日本クラウンから発売されました。

その後福岡や宮城の震災復興のイベントで、また海外の日本人学校で歌いました。日本の良き心を伝えるためにも、その活動が岩手県知事の耳に届き、いわて文化大使を委嘱され、早3年になります。

あつて、日本クラウンから発売されました。その後福岡や宮城の震災復興のイベントで、また海外の日本人学校で歌いました。日本の良き心を伝えるためにも、その活動が岩手県知事の耳に届き、いわて文化大使を委嘱され、早3年になります。

あつて、日本クラウンから発売されました。その後福岡や宮城の震災復興のイベントで、また海外の日本人学校で歌いました。日本の良き心を伝えるためにも、その活動が岩手県知事の耳に届き、いわて文化大使を委嘱され、早3年になります。

あつて、日本クラウンから発売されました。その後福岡や宮城の震災復興のイベントで、また海外の日本人学校で歌いました。日本の良き心を伝えるためにも、その活動が岩手県知事の耳に届き、いわて文化大使を委嘱され、早3年になります。

多士済済

～館友からのメッセージ～

東日本大震災から半年が経って

東北大学大学院生命科学研究所
准教授 大橋 一正 (昭和60年生)

3月11日から半年が経ちました。仙台からご報告いたします。

最初に、この震災と津波により亡くなられた方々に心よりご冥福をお祈りいたします。また、半年経った今でも、津波と原発事故によって不自由な暮らしを余儀なくされている方々に少しでも早く今までの暮らしを取り戻せますようお祈り申し上げます。

私は、東北大学に勤めており、震災当日は仙台市中心から近くの青葉山キャンパスに居りました。初めて体験する大きな地震でしたが大きくゆっくりと揺れたため、その時はこれほどの被害

害になるとは思いませんでした。実際に、津波は街を根こそぎ破壊する凄まじいものでしたが、建物が多く倒壊した阪神大震災と様相が異なり、内陸部では地震による建物や人的な被害は幸運にも少ないものでした。ただし地震の大きさからすると軽微というところで、ライフラインが復旧されるまでの約1ヶ月間、日常生活が止まりました。

その後の数ヶ月、私は大学の研究・教育の復旧に追われましたが、全国の方々の支援を受けました。この順調に復旧いたしました。授業も再開され、学生のほとんどはキャンパスに帰ってきました。ボランティアに活躍する学生も多かったです。授業の開始が1ヶ月遅れたため、学生には1ヶ月短い夏休みで我慢してもらいましたが、新学期となり元気な姿を見せてきています。身近なところでも復旧は進んでおり、仙台空港は10月に正常に戻りました。道路や建物も必

そんなコンサートが続ける中、3・11、あの震災がありました。僕はコンサートで岩手に向かう途中でした。一年前に仙台フィルとコンサートのツアーで回った三陸の目を覆うような惨状の映像が届き、言葉を失いました。凍りつきそうな心情の中に、義援金を集めるコンサートを重ねました。

そして4・11、福島県いわき市、海岸に近いところの避難所に、暖かい炊き出しと、コンサートを届けに行つて来ました。僕たちは総勢約40名、ようやく開通した道路を乗り継ぎながら、避難所の中学校にたどり着きました。

炊き出しの後、避難所である講堂に移って、コンサートを。僕も「雨ニモマケズ」を歌いました。騒がしかった避難所が、急に静かになって、皆さんじつじつ

り聞き入ってくれ、受け入れてくれました。そして段ボールの仕切りの中から、涙を流されている皆さんを見て、ハッとしました。

もしやこのために、8年前「雨ニモマケズ」のメロディが降りてきたんだらうか。向こうの世界の賢治さんは100年後の、この大震災をも知っていて、あらかじめ言葉とメロディを授けてくれたんだらうか。震災があつてから歌うのではなく、何年もかけて歌うからこそ、「雨ニモマケズ」だったんだらうか。そうですように。

おかげさまで2012年9月、デビュー30周年を迎えます。修猷九大と進みながらの歌手人、今にして思えば本当に不思議な歩みでした。

それでも今、自分に課せられた役割をしっかりと見つめ、そして言葉と音楽の力を信じ、コンサートが続けていこうと思つています。館友の皆様のおかげです。どうか今後も、共にありますように。



29周年コンサートにて



研究室にて

山から後輩たちへ 〜第15回植村直己冒険賞受賞記念対談〜

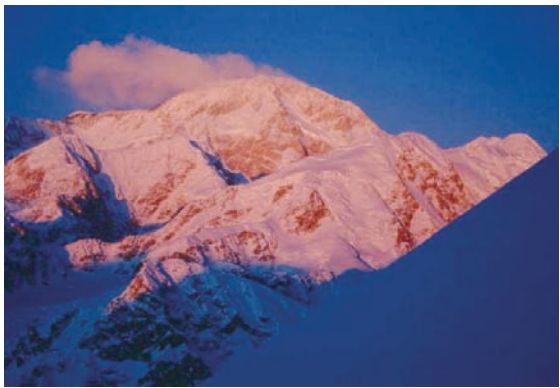
昨年、第15回植村直己冒険賞

を修猷山岳部OBの栗秋正寿氏(平成3年卒)が「中央アラスカ山脈83日間に及ぶハンター(442M)冬季単独登山挑戦」で受賞。そこで、氏と高校時代から交流があり、現在は修猷山岳部OB会長である横田隆氏(昭和37年卒)と受賞のこと、今後、後輩達に繋いでいきたいことについて語って頂いた。

栗秋 最初は驚きました。中央アラスカの三山に挑戦中なのですが、その内マッキンリー、フォレイカーは登って、残るハンターはまだ挑戦中。「挑戦途上で何故」というのはありました。でも選考委員の方から、実績・あなたの姿勢そして応援の意味を込めてというお話を頂き、お引受けして良かったと思っております。勿論修猷山岳部OBの方々からも即、お祝いの電話を頂き、続けていて良かったとつくづく感じました。

栗秋 一般の方には「よっしゃ、行くぞ」という突進のイメージをお持ちかもしれませんが、寧ろ真反対だと思いますね。頂上に行きたいという目標は勿論あり、できる限り努力しますが、それ以上に

—高い山に挑戦というと厳しい所に挑むイメージがありますが、



2010年1月 夕焼けのマッキンリー
ハンター西稜の2620m地点にて栗秋氏撮影

栗秋 自分は冒険家ではなく山の旅人だと思っています。何故そのように自称しているかというと、一つは自分達で食事を作って泊まるという旅の要素があること。そして登れる条件が揃うまでひたすら待つ、待っている間に日記をつけたり、ハーモニカを吹いたり。そういうところからです。そして動けるときには即動くわけです。

栗秋 「行きたい」という自分も一人の冷めた自分が「これ以上突っ込んでいったら帰れないよ」と抑え込んで、「じゃあ仕方ないね」と。だから「行きたいけど行けない」というのは想定外の事故が起こったわけなので比較的冷静ですね。

栗秋 雪上訓練もして下さって、あれはためになりました。滑ってもきちんと止められるという自信がつけられたら、横田さんがおっしゃったように自由に動けるんですよ。

栗秋 他にも合宿中に色々教えて頂きました。台風に遭い、今後の選択肢の相談をした時には「無謀はいけませんが、計画・目的がある以上、遂行する努力はしないと」とおっしゃったんですよ。今でも非常に残っています。

栗秋 まさにその通りで。現役生だけでなく全ての方に一つだけ最後にお伝えしたいのは「かけがえない命をどうか大切にしてください」ということですね。危険な所にも行っているんですけど、一番大切にしていることだし、つくづくそう思いますね。

栗秋 新年おめでとうございます。アメリカは五大湖地方のミシガン州、自動車産業の地デトロイトの近郊に住んで早26年になります。ミシガンはswing statesのひとつで、80年代にレーガンデモクラットで有名になりました。リーマンショック以来、米国人にとって苦難の時代が続いていますが、ミシガンも例外ではありません。製造業の仕事の多くが海外に流出し、ビッグ3のGMやクライスラーは会社更生に追い込まれ、住宅バブルが弾け、金融危機のあおりで老後の貯え

栗秋 2012年が、建設的で良い一年となりますように。

栗秋 自分が経験したからね。OB面して付いて行った価値がなきゃねってことで。

栗秋 自分が経験したからね。OB面して付いて行った価値がなきゃねってことで。

栗秋 自分が経験したからね。OB面して付いて行った価値がなきゃねってことで。

栗秋 自分が経験したからね。OB面して付いて行った価値がなきゃねってことで。

栗秋 自分が経験したからね。OB面して付いて行った価値がなきゃねってことで。

栗秋 自分が経験したからね。OB面して付いて行った価値がなきゃねってことで。

栗秋 自分が経験したからね。OB面して付いて行った価値がなきゃねってことで。

世界に輝く六光星 〜修猷卒業生海外レポート〜

ウイリアム王子ご成婚に続きポールマッカートニーの3度目の結婚など話題の多い英国では、今年のオリンピックを控え、いよいよムードが盛り上がりつつあります。

栗秋 自分が経験したからね。OB面して付いて行った価値がなきゃねってことで。

栗秋 自分が経験したからね。OB面して付いて行った価値がなきゃねってことで。

栗秋 自分が経験したからね。OB面して付いて行った価値がなきゃねってことで。

栗秋 自分が経験したからね。OB面して付いて行った価値がなきゃねってことで。

ブラジルW杯はうまくいくのか フリーアナウンサー 大坪 千夏(昭和60年卒)

栗秋 自分が経験したからね。OB面して付いて行った価値がなきゃねってことで。

栗秋 自分が経験したからね。OB面して付いて行った価値がなきゃねってことで。

栗秋 自分が経験したからね。OB面して付いて行った価値がなきゃねってことで。

栗秋 自分が経験したからね。OB面して付いて行った価値がなきゃねってことで。

栗秋 自分が経験したからね。OB面して付いて行った価値がなきゃねってことで。

アメリカ・自動車産業の街から 会計マネージャー 西岡(キルパトリック)寿里(昭和52年卒)

栗秋 自分が経験したからね。OB面して付いて行った価値がなきゃねってことで。

栗秋 自分が経験したからね。OB面して付いて行った価値がなきゃねってことで。

栗秋 自分が経験したからね。OB面して付いて行った価値がなきゃねってことで。

栗秋 自分が経験したからね。OB面して付いて行った価値がなきゃねってことで。

栗秋 自分が経験したからね。OB面して付いて行った価値がなきゃねってことで。

オのカーニバルの企画力、組織力にエネルギーは庄巻。貧富を問わず同じ喜びを分かち合う最高のエンターテインメントである。祭りごとの楽しみ方を誰よりも得た国民たちがもてなすW杯は心震える歓声に包まれるに違いない。そして祭り好きは必ず帳尻を合わせる才能があるということも確信している。

栗秋 自分が経験したからね。OB面して付いて行った価値がなきゃねってことで。

栗秋 自分が経験したからね。OB面して付いて行った価値がなきゃねってことで。

栗秋 自分が経験したからね。OB面して付いて行った価値がなきゃねってことで。

栗秋 自分が経験したからね。OB面して付いて行った価値がなきゃねってことで。

栗秋 自分が経験したからね。OB面して付いて行った価値がなきゃねってことで。

まごのOccupied Wall Street運動は、米国全土に広がりました。広がる貧富の差(不公平感)、高い失業率、若者の就職難。起きるべくして起きた感じがします。

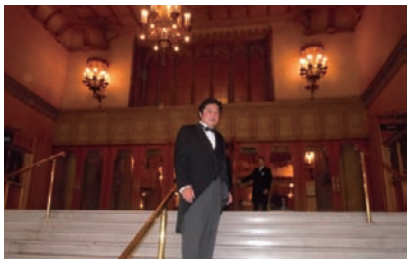
栗秋 自分が経験したからね。OB面して付いて行った価値がなきゃねってことで。

栗秋 自分が経験したからね。OB面して付いて行った価値がなきゃねってことで。

栗秋 自分が経験したからね。OB面して付いて行った価値がなきゃねってことで。

栗秋 自分が経験したからね。OB面して付いて行った価値がなきゃねってことで。

栗秋 自分が経験したからね。OB面して付いて行った価値がなきゃねってことで。



2010年10月 ロンドン金属取引所(LME)ディナーにて



対談中のお二人。左が栗秋さん、右が横田さん。



(リオデジャネイロ在住)



(シカゴ在住)

厥の猷を践み修めん

修猷館館長 中嶋 利昭



空を見る思いがした。まさに、「3・11」を境にしたパラダイムシフト(社会規範や価値観の変化)が起きているのであろう。

一 修猷館として

平成23年3月11日、三陸沖を震源とするM9という巨大地震が起きた。地震、その後の大津波で東北地方沿岸部は壊滅的な被害を受けた。圧倒的な自然の猛威を目の当たりにし、またその後の原発事故により経済活動の基盤であった電力を失い、更には放射能汚染という見えな

「こういう非常時こそ、浮き足立つことなく自らの足下をしつかり固めることが大事である。」教育現場でまず発せられる言葉である。高校生として出来ることと、出来ないことが当然ある。

平成23年3月11日、三陸沖を震源とするM9という巨大地震が起きた。地震、その後の大津波で東北地方沿岸部は壊滅的な被害を受けた。圧倒的な自然の猛威を目の当たりにし、またその後の原発事故により経済活動の基盤であった電力を失い、更には放射能汚染という見えな

立つことなく自らの足下をしつかり固めることが大事である。教育現場でまず発せられる言葉である。高校生として出来ることと、出来ないことが当然ある。

二 最後に

「3・11」以前において、周りを見渡せば、豊富な品物が溢れ、現在の若者はコンビニ、携帯電話、インターネットと便利さの中で社会と多面的な接点を持つ反面、個人意識の高まりとともに個の世界への逃避傾向にあるともいわれている。

三 決意

被災地に目を向け、復興支援に関わり、参加しようとしている姿があった。支援を通じて人々の思い、日本という国を思い、その思いを語る姿に、暗雲垂れ込めた日本の未来に雲間に覗く青

6月に生徒、保護者への研修旅行先変更の説明会を行った。様々な批判や指摘を受けた。その多くは、変更手続き面に対する不満であり、さらには放射線、余震に対する不安であった。マ

インフォメーション

修猷館の宮城県への研修旅行をきっかけに、東北で同窓会を発足した。

事務局は昭和45年卒の出納さんに連絡をとる事から始め、昨年10月2日に事前打ち合わせを開

10月10日には、館長先生一行10名が研修旅行の下見に仙台を訪れ、事務局と打ち合わせや懇親会を行っています。この時は、仙台を中心とした10名の館友が参加。主に研修内容について地元OBから情報提供が行われ、活

テロを乗り越えた絆

米国籍修猷会事務局 長浜 圭祐(昭和59年卒)



95年にニューヨークで始まった夏休みの海外研修もはや17年目。現在まで170人強の生徒達が参加してくれました。ただ過去に二度程中止を余儀なくされた事があり、その最初が世界貿易センタービルへのテロに於いて、厳戒態勢のニユー

ヨーク同窓会との交流会では、近年年配OB達と快活な議論を交わす光景が見られますし、女子生徒達の研修熱意には目を覚ますものがあります。また過去の研修生の中には、数年後大学生となつてゼミ研修で再訪してきた学生や、大学で進路に迷い、留学を志して訪ねて来てくれた学生など、世界の舞台を目指す後輩たちが育ち始めました。



前列右端が長浜さん

修猷美術—TOKYO展と私

伊佐ホームズ 伊佐 裕(昭和44年卒)

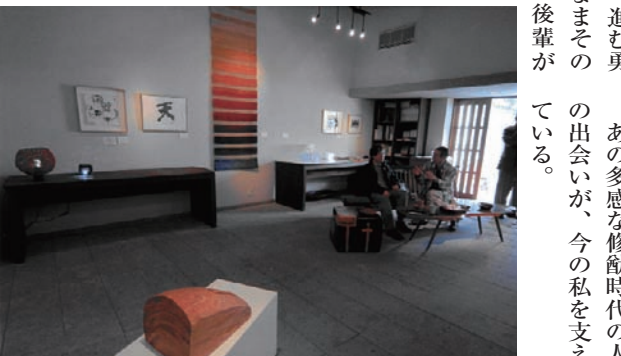


一枚の絵に最後の筆をおく。これだと思つた瞬間が訪れるのである。見事な美術展の完成だ。個々の作品が他の作品と折り合いをつけ展示され調和している。卒業以来個々の道を歩みながら、あの懐かしい部室での制作

その後「美術への心」が動き出し、37才にして商社マンから転身し、住宅建築会社を設立。この仕事を24年間続けてこられたのも修猷美術部があったからである。

春、3月は毎年、修猷美術—TOKYO展が美術部の恩師である河原大輔先生を偲んで、世田谷(駒沢)ギャラリー「樗」で開かれてる。出品者は職業として美術の道

幾度も配置を換えていくうちに時間もたち、疲れとともに、ため息も出る夕刻、やがて、不思議にも何が見え出し、収束に向う時が来るのである。



平成23年3月 第4回修猷美術—TOKYO展

連絡先: touhoku-syuyukai@excite.co.jp
HP: http://syuyukai.exblog.jp/

修猷フェスト!

2年生 執行部修猷フェスト担当長
江崎 奈生子

修猷フェストとは

修猷フェストとは中学生を対象としたいわゆる「体験入学」です。学校説明会、部活動見学、修猷生と直接話す談話会等、さまざまな催し物が行われ、外部の人にとっては、修猷の一端に触れることができる機会のひとつでもあります。



吹奏楽部によるミニコンサート(平成22年)

この修猷フェストが他校の体験入学と異なる点は、そのほとんどが生徒主体となっており、先生方が行っていることと、先生方が行っていることとが、ご存知の通り、生徒の主体性を重んじる校風から、約10年前、私たち執行部を中心に企画・運営が任されるようになりました。そのため来館されたお客様は、在校生と触れる機会がより多くなっています。

全国高校総合文化祭に参加して

2年生 新聞部副部長 仁禮 麻穂

福島県で開催された全国高校総合文化祭。東日本震災の影響で開催が危ぶまれていましたが、全ての企画は無事に行われました。

ここでの全国の新聞部との交流は思っていた以上に有意義でした。同じ新聞部でもレイアウトの組み立て方、記事を書く際のルールや部員内で使われるジャーゴン等に少しづつ違いがあり、中には一見大した違いではないようでいて、完成度の点

修猷を伝えたい

今年の修猷フェストでは「伝える」ということに重点を置いて、私たち執行部は8月から準備を進めています。

修猷には「伝統」「真面目」といった少し硬いイメージが強いと思われ、それが、修猷の楽しい一面も伝えたいと思っています。そのため、パンフレットや校内掲示物は、華やかで、楽しめて、なおかつ修猷の知られていない部分が見えてくるように心がけて作成しました。また、学校説明会や談話会では、在校生に修猷の魅力を熱く語ってもらう予定です。

さらに、修猷の「自由」につ

いても伝えたいと考えています。校則のない自由だと受け取られがちで、むしろ「自分で自分を律しなければならぬ」ということを伝えるたい。

「修猷に来たい」「修猷に行かせたい」と思っている方もいる。修猷フェストを通じて、少しでもわかったい。そして修猷の真の「自由」が何であるのか、この修猷フェストを通して、少しでもわかったい。そして修猷の真の「自由」が何であるのか、この修猷フェストを通して、少しでもわかったい。

「修猷に来たい」「修猷に行かせたい」と思っている方もいる。修猷フェストを通じて、少しでもわかったい。そして修猷の真の「自由」が何であるのか、この修猷フェストを通して、少しでもわかったい。

頑張ってます!! 修猷生!



新聞と教育賞を受賞。向かって右が仁禮さん。

また多くの人から異なる表現や表情で直接語ってもらうことで、全ての情報が実感を持って感じられたのです。

この経験から、メディアから情報を得ることも勿論大切ですが、それに留まらず、自分の目で、耳で、肌で、感じることも大切なのだと思いました。私は今まで漠然と、私達の記事の役目は読者に情報を与えることだ、と考えていました。しかし、私が書いた記事を読んだ人がその内容に興味を持ち、調べたり考

交流新聞づくりのための取材中、観光スポットの土産物店へのインタビューで、震災前よりも観光客が減っている話を聞くことができました。メディアの報道通りではありますが、メディアの報道ではなく、直接、その人の感じたことを感じた通りに、初めから終わりまで全てを聞き、

を新たな一面も含めて知っていた

「修猷に来たい」「修猷に行かせたい」と思っている方もいる。修猷フェストを通じて、少しでもわかったい。

「修猷に来たい」「修猷に行かせたい」と思っている方もいる。修猷フェストを通じて、少しでもわかったい。



平成23年度執行部メンバー。最前列右から3番目が江崎さん。

※ 本寄稿は、昨年10月時点のもので、平成23年度の「修猷フェスト」は、11月3日に開催された。

され、盛況のうちに終了致しました。(会報編集委員)

違和感はレース後には痛みに変わり、急に足に力が入らなくなりました。この時のことを私は今でも鮮明に覚えています。

2年前の夏、「高校1年でのインターハイ出場」を目標に臨んだ決勝。ところが走り始めた瞬間、右足に違和感を感じました。それでもゴールまで走り続けた。3位。念願の「高校1年でのインターハイ出場」を達成しました。しかし、レース中に感じた

挑戦し続ける心

3年生 陸上競技部 佐野 未来 (平成23年インターハイ 女子100m 出場)

医師の診断は舟状骨骨折。これは非常に治りが悪い為、ボルト挿入の手術を勧められました。1日でも早い復帰を願って手術を受けたものの、上手いはず、何度も手術を受けることになり、痛みに耐える日々が続きました。

「走りたいのに走れない」、そんな悶々とする日々が続きましたが、2年の春、時間はかかるが治る確率が高い、と医師から提案された。そして1年半という長い期間をリハビリに費やして迎えた3年の春、「どんな事があっても諦めるな」と励ましてくれた先生、家族、チームメイトなど多くの人の力を借り、再びインターハイに出場することができました。

結果は残念ながら予選敗退でしたが、次に繋がる一歩になったと思います。怪我をしたことで学んだことは多々ありますが、リハビリ期間中に感じたものどかしさや悔しさは、これからの競技生活において必ずプラスになると信じています。大学では高校時代に成し遂げられなかった日本記録更新を目標に、支えてくれる多くの人たちへの感謝の気持ちを忘れず、頑張っていきたいと思

修猷雑感—おじさんのつづやき

福岡輝栄会病院 山本 純也(昭和60年卒)

9月11日、修猷大運動会に行ってきた。基本的には昔と変わりなく、終始気合いの入った運動会です。チヤラチヤラしておらず、真剣で素晴らしいです。まさに、日本男児と大和撫子でした。棒倒し、騎馬戦、クールでカッコよかったです。女子のチアリーダー、とても華やかで可愛かったです。応コンも途中でバツクを変更するなど、昔よりパワーアップしていました。何度見ても熱くなります。

青春っていいですね。修猷サイコー!! 話が変わりますが、高2の長男が、きれいになったキャンパスで、朝の補習を頑張っていました。自分らのときも補習はあったようですが、出席した記憶が全くありません。昔はゆるかった。授業も2時間目から行ったり、授業中抜け出して飯食に行ったりしていました。もうかり、なんかも残っていて、朝からいきなり授業がないこともありました。さぼり過ぎて3浪しちやいました。

何にしても、伝統が引き継がれていてうれしと、修猷のグランドで、残暑の空を見上げて思うおじさんでした。



館友の活躍を応援しよう!

東京修猷会副会長 清田 瞭 (昭和39年卒)



いく時代であった。国民の誰もが明日は今日より良くなるというのを疑わず、将来に不安を感じる人もほとんどいなかった。いま、中国の姿を見ると当時の日本をおよび日本人の姿を思い出す。日本人観光客が世界中の観光地を我が物顔で歩き、先進国の人々の矚目を買ったという報道をよく目にすることもあった。

シヨックからやっと立ち直りかけた日本経済に東日本大震災と原発事故が襲い掛かり、アメリカはサブプライム問題とリーマンシヨックの後遺症から抜け出せず雇用悪化と住宅不振に苦しんでいる。ヨーロッパはギリシヤに端を発する政府債務問題から深刻なユーロ危機に陥り、対応を誤ると世界的な金融危機を引き起こす懸念をもたれている。

昨年、経済同友会の代表幹事に就任された武田薬品工業の長谷川社長はわが国経済の進むべき方向や原子力政策などに関して極めて明快な発信を続けておられます。また、日銀の審議委員の中村先輩も金融政策面で日本経済の底割れを防ぎマーケットの信頼を支えておられます。私たち同窓生もこうした人たちの活動を支え、応援して行くことはありませんか。

早いもので昭和39年に修猷館を卒業後47年になる。東京の予備校に通うことになりその年の東京オリンピックを目撃できたこと、昭和40年末、学費値上げ反対の全共闘による早稲田紛争が勃発し、それを契機に全国の大

学で学生運動が過激化、東大紛争や浅間山荘事件などにつながった事など、いまだに記憶に新しい。まさにわが国が戦後復興から経済大国に変貌を遂げて

昨年、2008年のリーマンショックからやっと立ち直りかけた日本経済に東日本大震災と原発事故が襲い掛かり、アメリカはサブプライム問題とリーマンシヨックの後遺症から抜け出せず雇用悪化と住宅不振に苦しんでいる。ヨーロッパはギリシヤに端を発する政府債務問題から深刻なユーロ危機に陥り、対応を誤ると世界的な金融危機を引き起こす懸念をもたれている。

このように先進国経済がそれぞれ弱点を抱えている中で40年、50年前の日本を髣髴させるBRICsをはじめとする新興国が世界経済のアンカーとしての役割を果たせるのか否か、いまや世界中の期待の視線が集まっている。特に人口13億の中国の成長が9%前後を維持できるといわれる。この成長を左右するかどうかは世界経済を左右する重要なポイントである。日本は世界の成長ポイント、アジアに隣接しているだけにアジアの成長を日本の成長に繋げることが出来れば人口減少の中でも成長を維持できるはずである。未曾有の円高をそうしたアジアへの進出やグローバル展開への武器として使えば円高もけつして悪いことばかりではない。

修猷の卒業生は産、学、官、政の各界に多くの人材を輩出しており、わが国の進路に大きな影響を与える立場の方々の活躍が日々伝わってくる。

私たちが「さんばち会」は、昭和35年に入学し、38年に卒業。そして50年近い歳月が流れた今、「さんばち会」では様々なイベントを企画して、友情の絆を深めています。

一昨年の11月、「入学50周年記念同窓会」を広島市の宮島で開催。安政年間創業の「岩惣本店」に宿をとり、全国から78名の仲間たちが集まって友情を確かめました。卒業以来、初めて同窓会に参加された方が3名も居たことが何よりも嬉しい出来事でした。翌日は世界文化遺産に指定された厳島神社に参詣し、広島がその昔軍都であったことの名残でもある江田島と、かつての広島随一の繁華街跡に設けられた平和記念公園および原爆ドームを訪れました。さらに3日目は、ゴルフ組と観光組に分かれて行動。ゴルフ組は、あいにくの雨ではありましたが広島屈指の名門コース「白竜湖カントリークラブ」で腕を競い合い、観光組は倉敷まで足をのばして、

学年便り

修猷在学中まるごと50周年

昭和38年卒 常任幹事 遠山 精一



入学50周年記念旅行にて

天領としての風情を残す町並みと大原美術館を楽しみました。昨年は、7月に25名の仲間が全国から集まって、富士登山に挑戦。残念ながら台風の為、山頂を極めることはできませんでしたが、河口湖畔の宿での宴は

編集後記

最初に東日本大震災で被災された方々に心からお見舞いを申し上げます。昨年、未曾有の大震災の中でクローズアップされた「絆」。今回の会報のコンセプトは「明日へつなぐ絆」です。

修猷というかけがえのない時代を体験した者同士が共有する「絆」は、世代を超え、前を向き、明日へと繋げていく、力強い「絆」だと考えます。私たちは、修猷という「絆」を胸に頑張り続ける館友の姿を伝えることで、私たちの中にある「修猷」を感じ、そして次代に繋ぎたいと、この会報を編集しました。

2011年度寄付金

2010年11月1日から2011年10月31日までに多数の皆様からご寄付いただきました。ありがとうございます。お礼の意味を込めてお名前を掲載させていただきます。(敬称略・卒年別)
また、年会費の納入をまだ済まされていない方は、同封の郵便振替用紙にてご送金くださるようお願い申し上げます。(一口3千円)。3千円を超えた額は寄付扱いとさせていただきます。

00170-6-172892 東京修猷会事務局

- (昭9)富田明德、(昭11)橋本胖、(昭12)宮川一二、(昭15)明石隆次、(昭17)朽葉泰生、(昭19)早野俊一、田尻重彦、毛利昂志、(昭20)田中庸夫、野上三男、ジャニイ岩橋、尾島成美、(昭21)小渋雅亮、(昭22)伊藤輝夫、岡崎登、増崎昭夫、濱田理、高嶋一衛、(昭23)井上洋一、助川義直、大西勇、白木彬雄、柳泰行、(昭25)山本義治、松岡肇、(昭26)横瀬一郎、吉田周弘、小西正利、常岡宏、太田進、大平修、中村道生、貞方一夫、藤吉敏生、湖上貫之、(昭27)金田久仁彦、徳山悟郎、(昭28)児玉黎子、真武保博、炊江律子、田中憲明、(昭29)高木道子、三宅昱子、村越登、藤本昭穂、(昭30)喜多村寿信、久保久、原田雅弘、堤正、田中栄次郎、(昭31)阿部公明、原田宗親、溝部信介、高崎洋一、城戸弘、石橋明、村田和夫、中村保夫、箱島信一、(昭32)井上智晴、鳥居健太、藤井新三、平野熙幸、林克己、和田聿生、國分英臣、(昭33)河野理、寺澤美和子、大西正俊、武石忠彦、米倉實、(昭34)加藤泰、岩田龍一郎、行武賢一、讚井邦夫、川辺敬治、田中義人、(昭35)伊藤洋子、可見晋、江川清、今村宏明、左元雄、小野勝利、松尾俊一、中村清次、中村拓介、(昭36)宇山博藤、横倉稔明、光安哲夫、山本博、重光碩、倉成洋三、中島成之、田中直樹、土井高夫、浜地康彦、(昭37)大須賀頼彦、(昭38)上田茂、渡辺紀大、(昭39)貝島資邦、松本陸彦、清田瞭、(昭40)山形紀明、森秀則、泉和雄、長谷川閑史、由良範泰、(昭41)安田修之助、吉武和則、渡辺耕士、有山賢良、林田健、(昭42)溝上雅史、(昭43)伊豆安生、宮地徳文、谷哲二郎、(昭44)安川裕行、横田勝介、(昭45)赤松康親、湖上一雄、(昭46)栗山英俊、鹿見島正信、土肥研一、(昭47)横山正、塚本幸一、内田公至、(昭49)井手富士雄、橋村秀喜、古森光一郎、大島光子、(昭50)古賀隆太郎、徳納一成、野中哲昌、(昭51)加藤純一、油田哲、(昭52)江藤和実、寺岡隆宏、(昭53)上蘭勉、新納康彦、村田隆信、(昭54)中原誠也、(昭56)河野弘、岩崎早苗、三谷直幸、(昭57)光宗信吉、(昭58)安部眞一、井手慶祐、(昭60)讚井和則、朱雀誉史、(昭62)鎌倉靖二、剣彰彦、田尻公一、(平2)福永かおる、(平10)岩田周子、(平15)重富耕太、(昭43)学年

2011年 二木会

- 第571回 H.23.1. 谷 哲二郎氏 (昭和43年卒) [故人]
株式会社ルミネ 代表取締役社長
『思いの先をよみ、期待の先をみたま』
- 第572回 H.23.2. 鳥羽 隆一氏 (昭和61年卒)
日産自動車株式会社 アライアンスCEOオフィス 主担
『ゼロエミッション社会に向けて！
—電気自動車の市場投入に携わって—』
- 第573回 H.23.3. 井手 明彦氏 (昭和35年卒)
三菱マテリアル株式会社 会長
『我が経営(三菱マテリアル)を通しての資源問題』
- 第574回 H.23.4. 梶山 千里氏
九州大学前総長
『若人へ向けて！
～創造性の育み方と思ひ込みの怖さ～』
- 第575回 H.23.5. 桑野 博行氏 (昭和46年卒)
群馬大学大学院 病態総合外科学 (第一外科) 教授
『外科学の“これまで”と“これから”』
- 第576回 H.23.7. 品川 昌俊氏 (昭和56年卒)
JFEスチール株式会社 技術企画部
地球環境グループ 主任部員 (課長)
『大震災後のエネルギー政策と、
鉄鋼業の温暖化対策』
- 第577回 H.23.9. 洞 駿氏 (昭和41年卒)
全日本空輸株式会社 代表取締役副社長
『航空戦国時代』
- 第578回 H.23.10. 谷川 佳枝子氏 (昭和49年卒、旧姓・橋崎)
『野村望東尼に魅せられて』
- 第579回 H.23.11. 田村 幸雄氏 (昭和40年卒)
東京工芸大学教授
『強風災害低減と健全な都市・建物づくりのために』
- H.23.12. 忘年会 ※肩書・所属は講演時のもの

東京修猷会 URL <http://www.shuyu.gr.jp>



会報編集担当一同

昭和60年卒

心からお礼申し上げます。